airiti Library

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

以宮崎駿《風之谷那吾西卡》為標的考察日本文化中「風」之形象

Shape of "Wind" Consideration in Hayao Miyazaki's First Work 'Nausicaa of the Valley of the Wind'

doi:10.29714/TKJJ.200912.0003

淡江日本論叢, (20), 2009

作者/Author： 曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page： 33-48

出版日期/Publication Date：2009/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200912.0003

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

以宮崎駿《風之谷那吾西卡》為標的考察日本文化中「風」之形象

曾秋桂
淡江大學日文系教授

摘要

深究「風」之形象，攸關日本文化之深層探索。面對此一大課題之際，本論文嘗試概觀文化流行現象「風」背景之後，取材同樣是以「風」命名的日本動畫大師宮崎駿處女作品《風之谷那吾西卡》(1984)，探討其中描繪「風」之形象，繼之分門別類、整理分析，素描出其中之傳承、斷層、再生之相互關係。

考察結果顯示：如同「千風之歌」慰藉了像是因 911 事件（2001）重大事故造成親人突然死亡而受到打擊的全世界人們創傷。然此撫平心靈創傷「風」之效力，沒有明顯出現於《風之谷那吾西卡》中。而《風之谷那吾西卡》則在面對黑暗的生存戰爭之下，深著於大自然與日常生活間而形成生活慣習當中，孕育出幾近於宗教的「風」神之信仰。進而鋪陳與「風」共存亡的概念於其中。

關鍵字：風　動畫版　漫畫版　宮崎駿《風之谷那吾西卡》　信仰

airiti

Shape of "Wind" consideration in Hayao Miyazaki's first work 'Nausicaa of the Valley of the Wind'

Tseng, Chiu-Kuei
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Investigating the shape of "Wind" leads to the search for the Japanese culture to the depths. In this thesis, the background of the fashion of "Wind" that is the cultural phenomenon is considered at first. This thesis continuously took up 'Nausicaa of the Valley of the Wind' (1984) of the animated cartoon version and the cartoon version. And, the main discourse part has done focus to the shape of Hayao Miyazaki's "Wind". And this thesis classified, and arranged the shape of "Wind". In addition, this thesis roughly has sketched the interrelation like the legend, the rupture, and the reproduction, etc.

As a result of consideration, the belief to "Wind" in nature and life exists against the dark of the war in Hayao Miyazaki's 'Nausicaa of the Valley of the Wind'. In a word, the story of "Wind" and man's symbioses composes the part of the discernment of the work as for Hayao Miyazaki's work.

Keywords: Wind, animated cartoon version, cartoon version, 'Nausicaa of the Valley of the Wind', belief

airiti

宮崎駿の処女作『風の谷のナウシカ』における「風」の形象の一考察

曾秋桂
淡江大学日本語学科教授

要旨

「風」の形象を究明することは日本文化の深層への探索にも繋がる。本論文では、この大きな課題に向けて踏み出す試みとして、文化的現象としての「風」が流行りだした背景を見ながら、まず研究対象を、原作、脚本、監督の仕事を担当し宮崎駿の意志が比較的強く反映した処女作『風の谷のナウシカ』(1984)を取り上げ、「風」の形象にフォーカスし、それを分類、整理した上で、伝承、断絶、再生という相互関係を素描した。考察の結果、911 事件（2001）のような死を受容する「千の風になって」のような万国共通の希求は、それに先立つ宮崎駿の『風の谷のナウシカ』（アニメ版は 1984、マンガ版は 1982-1994）には見られず断絶しているが、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』では、戦争という暗に対して、風土に根を張った大自然と日常生活との密接な関係を取り入れる生活慣習から生まれた「風」の神様を造形し、宗教心に近い「風」への信仰が定着している、「風」との共生の物語が作品の明の部分を成している。

キーワード：風　アニメ版、マンガ版　『風の谷のナウシカ』
信仰

airiti

宮崎駿の処女作『風の谷のナウシカ』における「風」の形象の一考察

曾秋桂
淡江大学日本語学科教授

１．はじめに

2006 年にオペラ歌手秋川雅史が発表して以来、反響を呼んでいる歌「千の風になって」に示される如く、日本の文化には「風」をめぐるイメージの流れがある。「千の風になって」[1]は、諸説[2]のある中で、2001 年のアメリカ 911 事件の鎮魂歌と見なされている。また、世界的に有名なアニメ作家宮崎駿のデビュー作『風の谷のナウシカ』（1984）は、「風」が主題となっている。ドラえもんシリーズの映画『風使い』(2003) も、その趣を受けて作られた。そして、日本フジテレビ局が出した開局 50 周年記念ドラマ『風のガーデン』(2008) [3]

---

[1] 2006 年 5 月 24 日に発売した CD の歌詞カードでは、「作詞:不詳 作曲:新井満 日本語詞:新井満」とある。2009 年 9 月のテレビ曲が作った台湾南部に被害をもたらした台風 8 号(莫拉克)ドキュメンタリではテーマ曲として日本語のままで使われている。

[2] フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると、イギリスの日刊紙『タイムズ』2004 年 11 月 5 日号によると、『千の風になって』の原詩である『Do not stand at my grave and weep』は、2004 年 9 月 25 日 98 才で逝去したアメリカ人女性メアリー・フライの作品だとされる。この詩の起源としては、この説がもっとも有力とされるが、海外においてもまだ論争はあり、確実な説というわけではない。この説に関しては、新井満は単行本版『千の風になって』において、原作者をめぐる複数の説の一つとしてメアリー・フライの名前を挙げているものの、決定的な説としては紹介しておらず、作者不詳とするのが最も適切だと主張している。新井満は、英語詞とほぼ同様のものがネイティブ・アメリカンの Web サイトに紹介されていると主張するが(週刊誌『プレイボーイ』)、URL を明らかにしていない。また、1911 年に亡くなったコマンチ族の指導者の墓石に刻まれていると主張するが、墓石の存在は明確に示されておらず、また（メアリー・フライがこの詞を書いたとされる）1934 年以前に建立されているという根拠も示していない。

[3] http://wwwz.fujitv.co.jp/garden/topics/index.html では、『風のガーデン』はフジテレビ開局 50 周年記念ドラマで、2008 年 10 月 9 日から 12 月 18 日まで 11 話に分けて、木曜日夜 10 時に放送された。脚本は著名なシナリオライター倉本聡で、実力派俳優の緒形拳の生前最後の出演作品であるという。

airiti

は、それに先だって公開された映画『送り者』(2008) と共に、「死」を冷静に受け止めるドラマ[4]として広く支持され、台湾でも[5]上映し、話題を呼んでいる。このように、視聴映像世界では、「風」をテーマにした作品は珍しくないのである。

一方、文字に訴える日本文学作品の世界を見よう。古典文学では、古代の『古事記』[6]の歌謡で緊急な事件を暗示している「風」、『万葉集』[7]の和歌でもの悲しい気持ちが託された「風」、中古の『古今和歌集』[8]の和歌では天上への通路を閉じる不思議な力を持つ「風」、『源氏物語』[9]では生霊の出現を意味する「風」、中世の『平家物語』[10]では無常観を表した「風」、近世の『雨月物語』[11]では死霊を意味

---

[4] 2008 年 9 月 13 日に公開放映した人気映画「送り者」の主題とは軌を一つにしている。

[5] http://www.jettv.com.tw/program/show.asp?ID=278 によると、台湾の「JET テレビ局」に 2009 年 8 月 6 日より月曜日から金曜日までの夜 10 時から放送されたという。

[6] 倉野憲司・武田勇吉校注(1977・1958)「古事記中巻」『日本古典文学大系 1 古事記祝詞』岩波書店 P165 では、「狭井河よ雲立ちわたり畝火山木の葉騒ぎぬ風吹かむとす」とあるように、政治的謀叛を暗示している。

[7] 高木市之助代表校注(1976・1962)『日本古典文学大系 7 万葉集四』巻 19・4291 大伴家持の歌岩波書店 P387「わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも」とある。

[8] 小沢正夫校注(1971)「巻十七雑上」『日本古典文学全集 7 古今和歌集』小学館 P332 では、「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ」とある。小沢正夫の校注によると、「当時の人は鳥などの飛ぶ道が雲や霞の中にあるとして歌を詠んだ」(P332)という。

[9] 玉上琢彌(1969・1964)「夕顔」『源氏物語評釈第一巻』角川書店 P413-415 では、夕顔が物の怪にとりつかれて頓死した場面は、「よひすぐるほど、すこしねいりたまへるに、御枕がみにいとをかしげなる女ゐて、おのがいとめでたしと見たてまつるをば、たづね思ほさで、かくことなる事なき人をゐておはして、時めかしてたまふこそ、いとめざましくつらけれ、とて、この御かたはらのひとをかき起さむとす、と見たまふ(中略)右近をひきよせたまひて、西のつま戸に出でて、戸をおしあけたまへれば、わた殿の火も消えにけり。風すこしうち吹きたるに、人はすくなくて、さぶらふかぎり、みな寝たり」と描写されているように、物の怪が出現したときに、わた殿の火が消えると共に「風」が吹いている。なお、夕顔の命を奪った物の怪の正体については、林田孝和代表(2002)『源氏物語事典』大和書房 P406 では、古来、六条御息所の生霊とする説と、廃院の妖物説の二つの説が対立しているとされている。

[10]高木市之助代表校注(1969・1959)『日本古典文学大系 32 平家物語下』岩波書

airiti

する「風」などのように、「風」が様々に造形されている。

近代の漱石文学では、不徳義事件(不倫事件)が「大風」(十四)に譬えられた『門』(1910)や乃木大将の殉死が「悲痛な風」(「中両親と私」十三)と比喩された『こゝろ』(1914)のような特別な用法も見られる。現代に入り、作家村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』(1979)も「風」を題名に使い、「風」のイメージを意識的にクローズアップしている。訴える手段には視聴映像、文字という違いがあるにしても、こうした多彩多様な形象を持つ「風」は、日本の文化の中で特有な「風」をめぐるイメージの流れがあることの傍証にもなろう。

「風」の形象を究明することは日本文化の深層への探索にも繋がる。この大きな課題に向けて踏み出す試みとしては、文化的現象としての「風」が流行りだした背景を見ながら、まず研究対象を原作、脚本、監督の仕事を担当し宮崎駿の意志が比較的強く反映した処女作『風の谷のナウシカ』に限定する。何故なら、日本の代表的アニメ作家として世界に認められた宮崎駿は専門分野での意味深い[12]デビュー作の題名を「風」に取っているからである。勿論、ジャパン・アニメーションと 80 年代サブカルチャー文学の「世界化」が酷似しているという点で、村上春樹と宮崎駿を取り上げて比較した大塚英志のような先行論究[13]も既に出ているが、本論文では別な観点、す

店 P83「たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ」と始まった無常観は全篇を貫く中心的思想である。また、高木市之助代表校注(1976・1960)「先帝身投」『日本古典文学大系 33 平家物語下』巻第 11 岩波書店 P337 で「二位殿やがていだき奉り、「浪のしたにも都のさぶらふぞ」となぐさめたたてまツて、ちいろの底へぞ入り給ふ。悲哉、無常の春の風、忽に花の御すがたをちらし、なさけなきかな」と長く人の心を深く動かすものがある。

[11]例えば、中村幸彦(1969・1959)『日本古典文学大系 56 上田秋成集』岩波書店「浅茅が宿」、「菊花のちぎり」、「吉備津の釜」などでは、必ずと言ってよいほど、亡霊が「風」と共に出現する。

[12]清水良典(2006)『村上春樹はくせになる』朝日新聞社 P90 では、「デビュー作にはその作家の全てがすでに表れているねなどとよく言われる」と、作家にとってのデビュー作の重要性を強調している。

[13]大塚英志(2009)『物語で読む村上春樹と宮崎駿―構造しかない日本』角川書店

airiti

なわち日本の文化に「風」をめぐるイメージの伏流があることを背景に、宮崎駿の処女作『風の谷のナウシカ』における「風」の形象を明らかにした上、視聴映像世界における「風」との伝承、断絶、再生という相互関係を素描して見ることにする。

２.「千の風になって」(2006)流行の背景

流行歌「千の風になって」が流行を見せた背景から検討して見よう。日本語の「千の風になって」は、その源を「Do not stand at my grave and weep（直訳：私のお墓で佇み泣かないで)」とし、近親者の死、追悼、喪の機会に読み継がれて来た有名な詩に求められる[14]。その有名な詩とは、いくつかのバージョンがあり、原作者の Mary Frye により、オリジナル・バージョンだと確認された詩は、以下のようである。

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.
I am in a thousand winds that blow,
I am the softly falling snow.
I am the gentle showers of rain,
I am the fields of ripening grain.
I am in the morning hush,
I am in the graceful rush
Of beautiful birds in circling flight,
I am the starshine of the night.
I am in the flowers that bloom,
I am in a quiet room.
I am in the birds that sing,
I am in each lovely thing.

[14]http://ja.wikipedia.org/wiki/Do_not_stand_at_my_grave_and_weep

airiti

Do not stand at my grave and cry,
I am not there. I do not die.

さらに、歌「千の風になって」が基づいた「A thousand winds 」の英語の歌詞[15]は、次のようである。

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.
I am a thousand winds that blow;
I am the diamond glints on snow,
I am the sunlight on ripened grain;
I am the gentle autumn's rain.
When you awake in the morning bush,
I am the swift uplifting rush
Of quiet in circled flight.
I am the soft star that shines at night.
Do not stand at my grave and cry.
I am not there; I did not die.

上に掲げた詩と歌との内容は、若干違うが、「千の風になって」の題は明らかに第三句の「a thousand winds」から取ったものである。また、共通に見る最後の詩句、歌詞の「I am not there. I do (did) not die.」に相通じる死者の不滅、いわば死者は死によって消滅することなく、いつも生者の傍に存在し続けていることは、親しい者の死を悼む人間の心的傷を癒してくれる。

一方、日本語歌「千の風になって」は、下記の通りである。

私のお墓の前で泣かないでください

[15]英語の歌詞は、2006 年 5 月 24 日に発売した CD の歌詞カードによる。ただし、「Author Unknown」とあるように、作者不明なままである。

airiti

そこに私はいません　眠ってなんかいません
千の風に
千の風になって
あの大きな空を
吹きわたっています
秋には光になって畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように　きらめく雪になる
朝は鳥になって　あたなを目覚めさせる
夜は星になってあたなを見守る
私のお墓の前で泣かないでください
そこに私はいません　死んでなんかいません
千の風に
千の風になって
あの大きな空を
吹きわたっています
千の風に
千の風になって
あの大きな空を
吹きわたっています
あの大きな空を
吹きわたっています

数えきれない数多くを意味する「千の風」(a thousand winds)、いわば「至る所に吹き渡る風」は、死者が持つ「不滅」なイメージと響き合っている。とはいえ、6 回も繰り返された日本語の歌詞「千の風」の方がより印象的である。「不滅」なイメージは、原詩、英語の歌詞にも共通し、世界万国で分かち合う心情の表現で、決して癒し系が流行っている日本の現代社会にしか見られないものではない。近親者の突然な「死」から衝撃を受けた人間の心的ケアへの希求は、万国共通な気持ちで、この歌が流行りだした背景でもあろう。

airiti

３．宮崎駿のアニメ版・マンガ版『風の谷のナウシカ』の「風」

視点を宮崎駿に移す。『風の谷のナウシカ』（以下、『風の谷』と略す）は、作品の時間は巨大産業文明が崩壊した 1000 年後、すなわち 30 世紀[16]で、作品空間は主に水車による風力をエネルギー源にした風の谷、それに隣接したトルメキア国とペジテ市、また広大な大地を飲み込んだ瘴気に溢れた「腐海」に設定されている。武力に訴え解決の道を求める人間と「腐海」に生息する巨大な蟲「王蟲」（自然）との対立が見られる。その対立が具体的に 2 人の女主人公「ナウシカ」と「クシャナ」の価値観の対峙にも投影している。

族長「ジル」の娘「ナウシカ」は村人に姫様と呼ばれて、風の谷で自給自足的に暮らしている。予言者の老女「大ばば」、城オジのミト老人たち、純朴な村人、ペジテ市の少年アスベル、「辺境地一の剣士」と聞こえるユパと言った人物が「ナウシカ」のまわりに配されている。それに対して、物語を動かすモチーフは、2 つの隣国ペジテとトルメキアが、千年間地下で眠っていた筈の、火で 7 日間世界を焼き尽くした旧世界の怪物と言われる「巨神兵」を巡る戦争である。トルメキア国の皇女「クシャナ」が勝利したのち、「巨神兵」を風の谷で蘇生させ、「腐海」と「王蟲」を焼き払おうとしたが、ペジテ市の残党による計画で「王蟲」が襲来し、風の谷が全滅の危機を迎えたところ、「大ばば」が嘗て言い伝えた「その者青き衣をまといて金色の野に降りたつべし。失われた大地との絆を結び、ついに人々を清浄の地に導かん」の如く、「ナウシカ」が自分の身を顧みることなく、救世主として「王蟲」の子を返す誠実な行動によって破滅の危機から人類を救出した。と同時に自分も復活したのである。

3.1『風の谷』の「風」

『風の谷』では、「風の谷」が地名として使われる以外、セリフに出た「風」の殆どは「風」を頼りに生活を営んでいる風の谷の村

[16]『風の谷のナウシカ』では、千年前に巨神兵が火を使って世界を 7 日間で焼き尽くしたことがその世界の前提であるため、仮に時代を『風の谷のナウシカ』が出来た 1984 年から千年後の 30 世紀に想定することもできる。

airiti

人ないしその類縁者に限られている。それを内容的に分類すると、「飛翔にかかわる技術」、「自然の恵み」、「風の信仰」、「戦争の兆し」の 4 種類である。それを逐次、見てみよう。

3.1.1「飛翔にかかわる技術」

物語の始まりで、ユパが「腐海」で銃を使ったため、「王蟲」が激怒してユパに突進しようとした危機一髪の時に、メーヴェに乗った「ナウシカ」が光弾、蟲笛を使い、上手に「王蟲」を帰り道に誘導した。「王蟲」とのチェイスの直後に、「先生」と呼ぶユパに「よい風使いになったね」と誉められた「ナウシカ」が、ユパの到来を通報するために一足先に村に帰るシーンでは、ユパはまた、「よく風を読む」と誉めた。ユパの誉め言葉にある「風」は、何れも風の向きに応じて、その動きを駆使し、空を飛ぶことに長けることで操りうる自然の恵みであり、風使いは「飛翔にかかわる技術」を知る者と見られよう。

3.1.2「自然の恵み」

アニメの最初では場面が「風の音」と共に風の谷に変わった。瘴気に満ちた「腐海」ではマスクを付けないと生きていけないが、風の谷ではマスクなしに自由に暮らせるほど、緑の畑が続く豊かな村である。こんな風の谷の様子を久しぶりに村に来たユパに聞かれた老人は、「風も水も滞りなく穏やかだ」と報告した。それは、「水と風が百年を掛けて森を育てる」という概念に通底している。「腐海」の厳しい環境と比べて、自然の恵みを浴びて幸せに暮らしている風の谷の人々の生活様子を見たユパは、戦争に闌けた列強が何故「この谷のように平和に暮らせぬか」と嘆いている。ここでは、風の谷の持つ桃源郷のようなイメージが浮かび上がってくる。

3.1.3「風」の信仰

大自然から多くの恵みを受ける中、風の谷の人々の「風」に対する信仰は日常生活に密着している。「トエトの子」が生まれ、その母親がユパに名付け親を頼んだ場面では、もう一人の婦人が横から口を挟んで、「いつもいい風がその子に吹きますように」と言った。ま

airiti

た隣国の武力侵略が風の谷に迫って来た時に、大ばばが「海から吹く風に守られるように」と祈った。そして、老人たちの間でも、水と風が百年を掛けて育てた森は、「貯水池を 300 年も守ってくれた森じゃ」と自慢している。最後の「大蟲」の襲来が風の谷に向かって突進したクライマックスでは、後から追い掛けた「ナウシカ」は、「神さま、風の神さま、どうかみんなを守って」と祈った。このように造形された「風」の神様は、「全ての人々を自在に悟りに導くという働きを持っており、人々に対しては、敵を追い払い、名声・子孫・家畜・財宝を与えるといわれている」[17]インド神話の風の神様ヴァーユが仏教に取り込まれて生まれた風神を思わせよう。このように、風の谷では、「風」を神様として敬い、誠心誠意を持って信じ切った「風」への信仰が村人の生活に浸透し、根付いているのである。

4.1.4「戦争」の兆し

トルメキア軍がペジテ市を攻撃して「巨人兵」を奪い、その輸送機が誤って森に下りたため森の蟲と「王蟲」に攻撃され、風の谷に墜落した。その直前の不吉な気配を感知した風の谷の老人ミトが「風が匂う」と言った。クライマックスの「大蟲」が襲来する寸前にも、村人が「風がない」、「風が止まった」、「風が止んだのは初めだわ」と言っていることから、村人は常に「風」の向きで緊急事態になる前触れを読み取る生活知恵を身に付けていると分かる。「大蟲」の襲来による破滅の危機が去ったとき、「風だ、風が戻ってきた」と村人は喜んで言った。このように、「風」は村人の信仰の対象になっただけではなく、住民が禍の兆を感知する符牒、予言でもある。

以上、『風の谷』における「風」の形象を見てきた。「風」は大自然の恵みとして理想郷の風の谷の住民に大きな影響を与えている。一方、住民の「風」への依頼や信仰は 400 年以上の歴史を有する風の谷の村で定着している。要するに『風の谷』は、風使いの「ナウ

[17]山北篤監修(2002)『東洋神名事典』新紀元社 P296

airiti

シカ」が邪悪な動きを払いのけ破滅の危機を救う、自然と生命の恵みである「風」と共に共生するメッセージが込められた、明るい物語である。一方、アニメ版『風の谷』(1984)より先に連載された長編マンガ版『風の谷のナウシカ』(1982-1994、以下マンガ版『風の谷』と略す）の「風」についても、その形象を一瞥しよう。

3.2 マンガ版『風の谷』(全 7 巻[18]1984-1995)の「風」

先行論究では、例えば「アニメ版では、マンガ版にはない父親ジルの殺害とナウシカの逆上の場面に彼女の予期せぬ戦闘力を凝縮する」[19]と両作品の内容の隅々まで綿密に比較した上での示唆に富んだ指摘もあるが、主題の「風」の形象に関して結論から言えば、アニメ版とマンガ版とは大した変わりはない。用法はアニメ版で分類した「飛翔にかかわる技術」、「自然の恵み」、「風の信仰」、「戦争の兆し」の 4 種類から逸脱する例はない。例としては、「風使いの娘」(第 1 巻 P136)と自称した「ナウシカ」は、父親の「ジル」に「父のわしより風の心を肌で感じとる心があるようだ」(第 1 巻 P30)と言われ、「先生」と呼んでいる「ユパ」に「すばらしい風の乗り手になったなナウシカ」(第 1 巻 P24)と誉められことが挙げられる。これは「飛翔にかかわる技術」の類である。また、「自然の恵み」に関しては、地の文で説明された「風の谷は海から吹き抜ける風によってわずかに腐海の毒から守られる辺境の土地であった」(第 1 巻 P26)、風の谷の村人が自慢する「ウム粒が重いし汁も多い風よう吹いたからな」(第 2 巻 P81)とあるように、大自然の恩恵を受けて平和に暮らす桃源郷のイメージを持つ風の谷の村人の生活ぶりが分かる。それから「風の信仰」に関しては、「いつもいい風が姫姉さまのほうに吹くように」(第 1 巻 P79)と「風」の神様に祈った風の谷の子供達

[18]テキストに使ったマンガ『風の谷のナウシカ』(全 7 巻徳間書店)の初出が 1984－1995 となっているが、一説には、月刊『アニメージュ』(1982)からの連載に注目し、初出を 1982 年から 1994 年だとした小山昌宏 (2009)『宮崎駿マンガ論』P6 の主張がある。

[19]中条省平(2007・1997)「戦いの倫理と飛翔の快楽」『総特集宮崎駿の世界』青土社 P107

airiti

の言葉からも、「風よ夜明けの風よ吾子らを連れ去る風よ。わしらの心もともに運んでおくれ。戦の帰り途で吾子らが谷への道を迷わぬように導くために」(第 1 巻 P84)と子供を戦争に見送った風の谷の親達が祈願した言葉からも、「風」の神様の存在を誠心誠意で信じ、日常時も非常時も「風」の庇護を乞う信心深い風の谷の村人の心境が窺われる。さらに、九死一生の時に、「ナウシカ」が言った「ちがうわ。私たちの風の神様は生きろといってるもの」(第 4 巻 P91)には心を強く訴える力がある。そして、ナレ族と平和条約を結ぶ際に、風の谷の代表者「城ジル」は、「風の神にかけてわれらのパンの半分を」(第 6 巻 P117)と誓った。要するに、風の谷の村人は風の神様の教えを生活規範にし、それに準じた行動を取ることが判明した。最後に、「このところ風がおかしい。他国からの便りもまったく途絶えておる」(第 6 巻 P113)や「どうもこの風のせいで疑心ばかり濃くなっていかんな」(第 6 巻 P114)と風の谷の兵隊が言ったことに対して、「大ばば」は、「この風を不吉な兆しとばかりはいえないよ」(第 6 巻 P114)と開示した。ここらかも、「風」の変わった様子を異変として見る風の谷の村人の持つ生活の知恵が分かる。ストーリーのモチーフである戦争について「明と暗」の主題[20]は違うにしても、アニメ版の「風」とマンガ版の「風」は物語の軌を一つにしているように見受けられる。言わば、アニメ作家としてデビューする出発点に際し、宮崎駿が「風」に託した心情は実はまったく同様なのである。いずれも、「風」は大自然の恵みとして理想郷の風の谷の住民に大きな影響を与えて、自然と生命の恵みである「風」と共に共生するメッセージが込められたのである。

４．結論―伝承、断絶、再生の観点から見て

文化的現象としての「風」の流れを明らかにする一端として、流

[20]同前掲小山昌宏書 P7 では「「宮崎アニメ」は常に人の心を和ませ、癒やし、勇気づける映像と評することができるが、「宮崎マンガ」は漆黒の闇であり、深層心理に淀み、人間の残酷さに眼を開く陰画なのである」と指摘されている。

airiti

行の背景を見ながら、宮崎駿『風の谷』を考察してきた。以下、結論を簡単に纏めたい。

911 事件（2001）のような近親者の非業の死から衝撃を受けた人間の心的ケアへの希求は万国共通の気持ちである。それを背景にして死者の不滅を譬える「千の風になって」（2006）のような歌が流行りだしたのである。

こういった死を受容する万国共通の現代的な希求は、先だって作られた宮崎駿『風の谷』（アニメは 1984、マンガは 1982-1994）には見られず、「風」の表象は断絶しているが、はっきりとした固有の「風」の主題を持っている。

宮崎駿アニメ版・マンガ版の『風の谷』では、戦争という暗に対して、風土に根を張った大自然と日常生活との密接な関係を取り入れる生活慣習から生まれた「風」の神様を造形し、宗教心に近い「風」への信仰が定着している、「風」との共生の物語が作品の明の部分を成している。

このように、今回検討した範囲では、心的ケアへの希求、「風」への信仰という 2 系列の「風」の表象が林立して、相互に断絶しているように見えるが、その根底には「風」との関係で「生命」の本質を問うという方向に共通点を見出すことができる。「千の風」に代表される、死を受容する希求は「風」を媒介としての生と死の往還を前提としている。『風の谷』は、生命を守り育てる作用としての「風」への信仰を訴えている。いずれも「風」は生と死を巡る圏域で登場しており、そこに何らかの焦点を結ぼうとしている。両方の「風」の表象の根底には、現代文明が「風」との関係で「生命」の本質を問う共通点を見出すことができた。

今後さらに考察対象を広げ、日本文化における「風」という重要な課題を追究していく中で、こうした生と死の根源に方向をとった課題を見定めていくつもりでいる。

（本論文は、2009 年 11 月 21 日に輔仁大学で開催された「2009 文化にお

airiti

ける歴史―伝承・断絶・再生国際シンポジウム会議」で発表した原稿を加筆、修正したものである。ここで断って置きたい。）

テキスト

スタジオ・ジブリ(1984) DVD 版『風の谷のナウシカ』Buena Vista
宮崎駿(1984-1997・初出 1984-1995)マンガ版『風の谷のナウシカ』全 7 巻徳間書店

参考文献(時代順)

倉野憲司・武田勇吉校注(1977・1958)『日本古典文学大系 1 古事記祝詞』岩波書店
高木市之助代表校注(1976･1960)『日本古典文学大系 33 平家物語下』岩波書店
高木市之助代表校注(1976・1962)『日本古典文学大系 7 万葉集四』岩波書店
玉上琢彌(1969・1964)『源氏物語評釈第一巻』角川書店
小沢正夫校注訳(1971)『日本古典文学全集 7 古今和歌集』小学館
神田秀夫・永積安明・安良岡康作校注訳(1971)『日本古典文学全集 27 方丈記徒然草正法眼蔵随聞記』小学館
河合隼雄(1989・1977)『無意識の構造』中央公論社
宮崎　駿(2002・1996)『出発点 1979～1996』徳間書店
(2007・1997)『総特集宮崎駿の世界』青土社
(2007・1999)『フィルムメーカーズ 6 宮崎駿』キネマ旬報社
佐々木隆(2005)『「宮崎アニメ」にひそめられたメッセージ』NHK ベストセラーズ
小山昌宏(2009)『宮崎駿マンガ論―『風の谷のナウシカ』精読』現代書館
大塚英志(2009)『物語で読む村上春樹と宮崎駿―構造しかない日本』角川書店